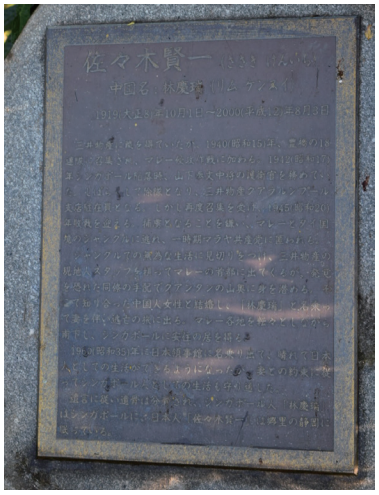
佐々木賢一（ささきけんいち）の顕彰碑

史蹟史料部

昨年の5月、シンガポールの若いアーティストの作品をサポートしていらっしゃる日本の芸術センターの方から、Eメールにて問い合わせを受けました。

日本人会発行の書籍「南十字星創刊10周年記念復刻版」556ページに「中国姓で生き抜いた30年　2人の元日本兵が戦争で失った“時間”」というインタビュー記事が載っている佐々木賢一（ささきけんいち）、またの名を林慶瑞（リム　ケンスイ）という男性についての問い合わせでした。

日本人墓地公園のメモリアルプラザには、佐々木賢一の顕彰碑があります。



佐々木賢一の顕彰碑

佐々木氏は1919（大正8）年10月1日生まれ、静岡県出身で日本大学経済学部を卒業するとすぐ三井物産に入社しました。しかし1940（昭和15）年、豊橋の18連隊に応召、翌年中国に派遣され広東の軍司令部暗号手となりました。その後、インド進駐にともないサイゴンに転属、海南島、シンゴラ（タイ）上陸部隊、マレー侵攻作戦に加わりました。1942（昭和17）年シンガポール陥落時、山下奉文（やました　ともゆき）中将の護衛官をつとめていました。

しばらくして除隊となり、以前の勤務先であった三井物産シンガポール支店、クアラルンプール支店駐在員となりました。

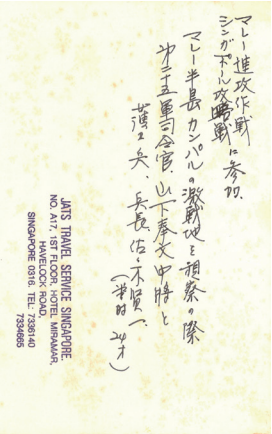
しかし再度招集を受け、1945（昭和20）年終戦を迎えました。

彼の数奇な運命が始まったのは、この時からでした。これからの日本と自分を考えた末、佐々木氏は捕虜となることを嫌い、マレーとタイ国境のジャングルに逃れ、一時期マラヤ共産党に匿われました。やがて英国のマレーシア独立承認によって戦いの目標を失った佐々木氏は、日本への望郷の念が高まり、三井物産のローカルスタッフを頼ってマレーの首都に出ましたが、発覚を恐れた同僚の手配でクアンタンの山奥に身を潜めました。

そこで知り合った中国人女性と結婚し、「林慶瑞」と名乗って妻を伴い逃亡の旅に出た佐々木氏は、ある時は中国人に、またある時はマレー人になりすまし、時には日本人とわかって住宅を追い出されたこともありました。マレー各地を転々としながら南下し、やがてシンガポールに安住の居を得ました。

1960（昭和35）年に日本領事館を訪れ、佐々木賢一と名乗り出て、晴れて日本人として生活ができるようになりました。

2000（平成12）年8月3日、81才で亡くなり、遺言に従い遺骨は分骨され、シンガポール人「林慶瑞」はシンガポールに、日本人「佐々木賢一」は郷里の静岡に眠っています。



写真の裏に書かれた佐々木氏自筆のメモ

（左）佐々木賢一（右）山下奉文中将

ニュースレター#41（2023年南十字星10月号）でご紹介した、ジョホール・バル日本人墓地に横たわる戦跡記念碑について、その建立の一部始終を目撃していたのも、山下奉文中将の護衛官を務めていた佐々木氏でした。

「マレーの虎」山下将軍揮ごう

崩れかかる碑 史実「後世に」

恩讐越え目を向ける動き

産経新聞記事

佐々木氏によると、この記念碑は陥落後に二十五軍の第五師団（広島）と第十八師団（久留米）の高級将校が山下将軍に揮（き）ごうを求め、マレー半島からシンガポールへの渡河地点にそれぞれ建てたものの一つでした。発見され、ジョホール・バル墓地にあるのは第十八師団のものです。

1945（昭和20）年8月の終戦と同時に日本軍がみずからの手で、忠霊塔などとともにこの記念碑も破壊したという記録が残っています。

1995年3月14日 慰霊祭で墓地を訪れたと思われる佐々木賢一さん

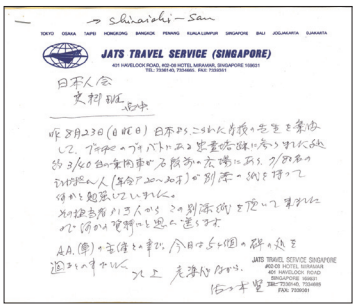
シンガポールで再び佐々木賢一と名乗りはじめた後は三菱商事に勤め、その後独立して旅行会社を始めました。

長い流浪の旅で知った近隣国各地の地理と言葉が、佐々木氏の大きな資本となりました。

「戦争以来失った人生を、これから取り戻そうと思っています。戦争の傷跡を多くの人に見てもらい、亡くなった人びととをとむらうのが私の務めです。仕事を通じて日本とシンガポール両国の理解促進にお役に立ちたいと思っています。」

佐々木氏のインタビューは、このように締めくくられています。

佐々木氏の旅行会社JATS TRAVEL SERVICE (SINGAPORE)は、日本人会史蹟史料部員として長くツアーガイドを務めていただいた顔　夕子（がん　ゆうこ）さんが勤務されていた会社です。



JATS TRAVEL SERVICE (SINGAPORE)

史蹟史料部に届いた佐々木賢一さん自筆の手紙

電話で佐々木氏のことを尋ねた際、「あまり喋らない、物静かな方でしたよ」、顔さんはそう話してくださいました。

史蹟史料部が佐々木氏についてニュースレターをまとめるきっかけになったのは、冒頭に書いたように、日本の芸術センターの方からの問い合わせでした。その方がサポートをしている若いシンガポール人アーティストの作品に、佐々木氏が登場しています。

その作品は『百鬼夜行』（Night March of Hundred Monsters）というタイトルで、日本古来の精霊である妖怪をテーマにしており、百鬼には元日本兵やスパイが含まれているのだそうです。佐々木氏が百鬼のうちの1人として描かれています。

シンガポールの子どもたちは、戦争の歴史、日本の占領時代を学校で学びます。百鬼という表現は、シンガポール人から見た戦争のイメージの一端を垣間見ることができるのかもしれません。この作品は2023年にドイツのフランクフルトで展示され、好評を得たそうです。

編集・画像：日本人会 史蹟史料部　両頭真衣

出典：
- 南十字星 創刊十周年記念復刻版
  シンガポール日本人会発行 1978年3月1日
- 産経新聞　1999年 日刊20425号
  8月26日夕刊
- 佐々木氏の自筆メモ/手紙　日本人会所有

ニュースレター掲載ページ

日本人墓地公園ページ